



おおあし

第4号

《 大芦小HP <https://oashi-e-konosu.edumap.jp/> 》

「スイミー」に学ぶ

先日、2年生の国語の授業を参観しました。教材は「スイミー」（レオ＝レオニ作 谷川俊太郎 訳）で、保護者の方も記憶している作品かもしれません。主人公はスイミーという小さな「からす貝」よりも真っ黒な魚です。たくさんいる兄弟は皆赤色でした。ある日、スイミー以外の兄弟は、「まぐろ」に一飲み込まれてしまいます。泳ぐのが得意なスイミーだけが逃げ伸びたのです。その後スイミーは海の中を探検していくうちに、岩かげに新しい仲間を見つけ、みんなで遊ぼうと声を掛けますが、仲間は、大きな魚に食べられるのが怖くて出て来ようとはしません。そこで、スイミーは考えに考え抜いた末にある作戦を実行します。それは、赤い魚たちが、それぞれの「もちば」について、大きな魚のように見せかけるのです。黒いスイミーは、その大きな魚の「目」となって、襲いに来た大きな魚の追い出しに見事成功するという物語です。

ところで、このお話は多分に人権の要素を含んでいます。よく知られている「みにくいアヒルの子」の話では、一人（一羽）だけ、違う色や毛並み・体形をしているために兄弟たちや周りの鳥からいじめを受けます。兄弟たちと違っていたのは、みにくいアヒルの子はアヒルではなく実は白鳥だったからです。スイミーは一人（一匹）だけ黒い色をしているのにもかかわらず、いじめを受けるところか、「広い海のどこかに、小さな魚のきょうだいたちが、楽しくくらしていた。」という書き出しで物語が始まります。そして最後には「黒い色」という特徴を見事に生かして、大きな魚を追い出すことができたのです。この物語は、一人一人（一匹一匹）小さくて弱くても、皆が協力することによって困難を突破できるということも教えてくれます。もし、スイミーが兄弟や周りの魚から、色が違うということで、いじめを受けていたらこのような展開にはならなかったのかもしれませんが、もちろん、作品の中にはスイミー自身が自分の「からす貝」よりも黒い体を気にしたりみじめに思ったりする場面は出てきません。また、自分以外の兄弟がマグロに食べられて一人ぼっちになっても、前向きに生きるスイミーの力強さも感じられます。

さて、仲間たちが協力して「大きな魚」になったわけですが、すぐにできることではありません。これにはものすごい努力が必要です。スイミーは仲間に「けっしてはなればなれにならないこと」「みんな、もちばをまもること」を教えます。どれくらい練習したでしょうか。「みんなが、一ぴきの大きな魚みたいにおよげるようになったとき、スイミーは言った。『ぼくが、目になろう。』」おそらく想像するに、仲間の「もちば」（だれはこの位置）を決めたり、仲間と仲間の間隔を調整したり泳ぐ速さを決めたりとかなり緻密に計算して練習したことと思います。まるで運動会の組体操のようです。仲間は自分たちの姿がどうなっているのかわかりません。全体を見ているのはスイミーだけです。そして、とうとう「一ぴきの大きな魚みたいにおよげるようになったとき」スイミーは初めて仲間に自分が「目」になることを伝えます。仲間もこの作戦のリーダーであるスイミーを信じて指示に従っています。それは、命がけで大きな魚を追い出すという目的があったからです。

学校・学級は組織であり、リーダーとフォロワーの関係が大事です。リーダーがいくらがんばってもフォロワーがついていかないとまとまりません。令和3年度がスタートして、三か月。各行事において、上級生がリーダーとしての自覚をもち下級生に指示をしたり補助をしたりしています。委員会の活動も活発になってきました。そして、各学級も各自それぞれの「もちば」である当番活動や係活動に責任をもって取り組んでいます。こうしてまた大芦小学校の伝統が築かれていきます。

(校長 橋本 浩)